

● 東日本大震災 復興支援活動

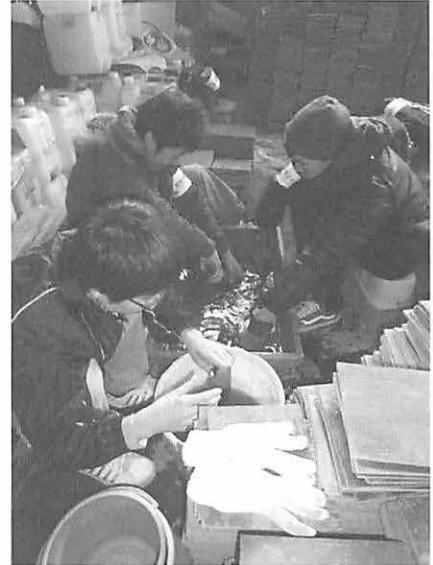
はじめに

龍谷大学では、2011年3月11日に発生した東日本大震災の復興支援のために2012年度も様々な取り組みを実施しました。

本学では、復興支援活動を大学として総合的に検討する必要があると判断し、発災直後の2011年4月に危機対策本部のもとに「学生ボランティア等の被災者・被災地支援活動検討プロジェクトチーム」を設置し、現在も継続的にプロジェクト会議を実施しています。

ボランティア・NPO活動センターでは、通常業務を行いながら、プロジェクトの事務局として震災復興支援関連事業の実施に携わっています。この項では、2012年度にボランティア・NPO活動センターがかかわった復興支援の取り組みについてまとめました。詳しくは、次項からの各報告をご一読ください。

各報告の前に、赤松学長が大学ホームページに掲載したメッセージを時系列に紹介します。



東日本大震災 被災地におけるボランティア活動に対する支援のお願い (学生・教職員のみなさまへ)

東日本大震災発生以来、龍谷大学では、学生・教職員が様々な形で復旧・復興を支援する活動に取り組んできました。たとえば、本学が窓口となって5回実施した被災地におけるボランティア活動には約130人の学生・教職員が参加しました。瓦礫の撤去で汗を流したり、地場産業である硯の生産のお手伝いしたりするとともに、被災された方々からいろいろなお話をうかがうこともできました。参加した学生はこの経験を通して大きく成長しました。被災地を見る・聴く・感じることによって、メディアからの情報だけでは伝わらないことがたくさんあることを知り、自分自身の経験を通して物事を判断することを学びました。

復旧・復興の道は長く、険しいものになるでしょう。私たちは、被災地が抱える現実から目をそらすことなく、根源的な地点に立ち返って、持続可能な社会を実現するために継続的に努力してゆかなければなりません。真実を求め、真実に生き抜かれた親鸞聖人の精神は、激動し混迷を深めるこの現代において、私たちの生きる指針や拠り所となるものと確信しています。

継続的な支援活動として、2012年度には、東日本大震災復興支援報告会、被災地の人々との交流（予定）、東日本大震災復興支援フォーラム、東北の物品販売に加え、被災地におけるボランティア活動を2回計画しています。被災地からの「防災教育という観点で訪れて欲しい、被災地を見る・聴く・感じる事が大切」というご意見を受けとめ、昨年よりも一層被災地に寄り添ったボランティア活動になるよう準備を進めています。

本学の学生・教職員による支援活動に対して大学は応分の援助を予算化しております。さらに、本学の構成員である私たち一人ひとりが震災で犠牲になり被害を受けたすべての方々に思いを馳せ、

寄り添いながら考え、そして行動することが大切だと思います。被災地でボランティア活動を行う学生に敬意を表し、支援することを通して私たちの思いを被災地に届けたいと思います。このような観点から、学生・教職員のみなさまにも被災地でボランティア活動をする学生を直接的に支援する輪に加わって頂くようお願いすることにいたしました。

つきましては、「東日本大震災 被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金」を募集いたします。どうぞ、みなさまのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2012（平成24）年6月
龍谷大学長 赤松 徹眞

支援金は下記のところでお引き受けいたします。みなさまのご協力をお願い申し上げます。

支援金箱設置場所・支援金送付先

- 【深草】「ボランティア・NPO 活動センター（深草）」深草学舎1号館1階
- 【瀬田】「ボランティア・NPO 活動センター（瀬田）」瀬田学舎青志館横
- 【大宮】「文学部教務課（大宮）」大宮学舎西費1階

締切日 2012（平成24）年7月20日（金）

学長メッセージ - 東日本大震災2年目をむかえて -

東日本大震災の発生から二年が経過しました。その後、お亡くなりになられた方々を合わせますと、2万人を超える尊い命が奪われるという未曾有の大災害になっております。東日本大震災の二年目をむかえ、犠牲となられたみなさまに改めて心から哀悼の意を表します。

また、地震と津波の被害、さらには、福島第一原子力発電所事故により避難を余儀なくされ、不自由で不安な毎日を過ごされている方々は、依然として膨大な規模におよんでいます。大震災の発生から二年が経過した今も、復興が進んでいるとはまだまだ言える状況ではありません。

龍谷大学の建学の精神は、親鸞聖人の教えにもとづく浄土真宗の精神です。私たちは、建学の精神の具現化として、この二年間、大学としてなし得る活動が何かを模索しながら、復興支援の取り組みにあたってきました。多くの学生、院生、卒業生、保護者、そして教職員のみなさんが、ボランティア精神にもとづき、多彩な活動を展開してきました。大学主催のボランティアバスも継続し、今年度は「見て、聞いて、感じて、伝える」をテーマに支援活動をおこなってきました。震災の事実を風化させることなく、取り組みを継続させることがますます重要になってきています。何よりも、被災者と被災地の要望をしっかりと受けとめ、一層の創意工夫を重ねつつ、復興支援の活動に取り組む重要性を痛感しています。

龍谷大学は今後とも息の長い復興支援の活動を志してまいりたいと考えています。どうぞ、みなさまの温かいお心とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2013年3月11日
龍谷大学学長 赤松 徹眞

企画名	東日本大震災 被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金
実施日	2012年6月11日(月)～7月20日(金)
場所	大宮・深草・瀬田キャンパス【窓口：ボランティア・NPO活動センター】
実施主体/運営	龍谷大学/ボランティア・NPO活動センター
参加人数	教職員給与天引き：77名、その他窓口での募金、校友会、親和会

■経緯・目的

東日本発災直後から、龍谷大学として募金活動やボランティアバスの運行など、様々な形で復興支援に取り組んできました。

発災から2年目を迎え、被災地への関心の低下が問題視されていますが、本学では、センターに被災地支援についての問い合わせ等が多数寄せられるなど、まだまだ関心が高いと感じています。

しかし、当然のことながら、関心のある人全てが直接的に支援活動に関わることはできません。そこで、その想いの受け皿として、本学では、学生による支援活動に対して大学は応分の援助を予算化していますが、本学の構成員である私たち一人ひとりが震災で犠牲になり被害を受けたすべての方々に思いを馳せ、寄り添いながら考え、行動するために、被災地でボランティア活動を行う学生・教職員を支援することを通して、支援する輪に加わる機会を作りたいと考え、「東日本大震災 被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金」を募集しました。

この取組みは、2012年5月に開催された学長会・部局長会で、東日本大震災復興支援プロジェクト（以下PJ会議）として、提案・了承され、実施することになりました。

■概要

PJ会議では、龍谷大学生の東日本大震災復興支援ボランティア活動をサポートするための募金を教職員等から募り、集まった資金を復興支援のボランティアバス運行や被災地での宿泊等、本学主催の復興支援ボランティアの際に学生への補助金として使用するために、「東日本大震災 被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金」への協力を本学の教職員に呼びかけました。

協力の方法としては、①深草・瀬田キャンパスのセンターと大宮キャンパス文学部教務課のカウンターに募金箱の設置②対象を本学教職員（専任教育職員（特任含む）・専任事務職員・嘱

託職員）に絞って、2012年12月、2013年6月、2013年12月の賞与引き落としの申込書と協力をお願い文書を配布し、協力を呼びかけました。

申込みは2012年7月20日を締切として、ボランティア・NPO活動センターで受付しました。

なお、受付期限を設けてはいますが、申し出があれば、それ以降も随時受け付けました。

■参加者の声・得られた効果など

①募金箱に寄せられた支援金

447,623円

②賞与引き落としでの支援金

3,095,000円

（内訳） 2012年12月期末手当 ￥1,345,000円

2013年6月期末手当 ￥800,000円

2013年12月期末手当 ￥950,000円

③親和会からの支援金

500,000円

④校友会からの支援金

500,000円

総合計 ￥4,542,623円（2013年3月末現在）

2012年度は、内¥328,192円を支援金として使用し、残りの¥4,214,431円は次年度以降の活動支援金として繰越しました。

■コーディネーター所感

この支援金事業に取り組むことによって、改めて、学内に潜在的にある『被災地復興支援のための思い』『復興支援に向ける学生の思いを応援したい』という教職員の想いの強さを実感しました。

「学生のためになら…」 「自分は行けないけれど、学生が活動をするのを側面的に応援したい」など、支援金を受け付ける中で、多くのメッセージを教職員の皆さんから受け取ることが出来ました。

この皆さんから託された想いを復興支援活動に参加する学生に伝え、チーム龍大として、復興支援にかける想いを活動先に届けることが出来るように、より中身の濃い、被災地の皆さんに寄り添った活動プログラムを計画し、実行し

ていけるように最大限の努力をしたいと考えています。

〈報告者：竹田 純子

(深草キャンパス コーディネーター)〉

企画名	東日本大震災 復興支援ボランティア活動報告会 復興支援活動に龍大生はどう関わったのか？ ～被災地で活動した先輩から話を聞いてみよう！～
実施日／場所	深草キャンパス：2012年6月28日(木) 17時30分～19時00分／3号館101教室 瀬田キャンパス：2012年6月29日(金) 17時30分～19時30分／3号館107教室
実施主体	龍谷大学／ボランティア・NPO活動センター
参加人数	深草キャンパス：約60人、瀬田キャンパス：約60人、合計約120人

■経緯・目的

発災から1年が過ぎ、マスコミ等では、復興支援ボランティアに興味関心が低くなってきていると危機感を語る声が聞こえてくる中、本学のセンターには『復興支援ボランティアに参加したい』という学生の来室が多数ありました。

本学には、多様な形で震災復興のためのボランティアに関わった学生が多数在籍しています。そこで、昨年度に被災地で活動した経験のある学生が、活動未経験の人にその経験を語る機会と、センターのコーディネーターから『活動する上での注意点』『センターに来ているボランティア情報』『ボランティアバス』についての説明を行う機会を設けることにしました。

■概要

●6月28日(木) 深草キャンパス

発表者：足立こころさん(大学院経済学研究科)
発災直後から1年間の公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンで活動した経験を話す。

発表者：高橋亮太さん(経済学部4回生)

大学が実施したボランティアバスで活動した経験を話す。

司会：竹田コーディネーター

復興支援ボランティアに関する説明

●6月29日(金) 瀬田キャンパス

発表者：足立こころさん(大学院経済学研究科)
28日と同様のお話

発表者：鹽井 勁さん(国際文化学部2回生)

大学が実施したボランティアバスで活動した経験を話す。

司会：東郷コーディネーター

復興支援ボランティアに関する説明
※両キャンパス共に参加者からの質疑応答の時間を設けています。

■参加者の声・得られた効果など

参加者のアンケートには、以下のような声がありました。

- ・テレビなどを通して被災地の映像や写真を見たが今回の話を聞いて、よりいっそう被災地へ行って自分の目で見て、肌で感じたいと思った。
- ・被災地へ行くことだけが復興支援ではないと言ってもらえて安心しました。関西で何か自分に出来るボランティアをやりたいと思いました。



■コーディネーター所感

震災から1年経って、マスコミで語られているように、本学でもボランティア熱が冷めてくるのかもしれないと考えていましたが、逆にボランティア希望者が増えてきています。その理由として、学生の周辺にボランティア体験者が増えてきたことによって刺激を受け、自分も活動してみたいと考える人が増えてきたからではないかと推測しています。

センターとして、今までにも活動報告会やガイダンスなどを実施してきましたが、その参加者は減少してきています。活動報告会だけでは学生の興味関心を引かないのだろうか？との危惧もありましたが、活動経験者が『どのような体験』をし、『何を想い』、『どんな人に出会っ

たのか？』などについて、体験者自らが話す機会、未経験の学生が直接話を聴ける機会、そして活動に際しての注意点などを伝える機会を作ること、重要であると考え、このような報告会を企画しました。

参加者は2キャンパスで120名と、もう少し多くの人に参加して欲しかったという想いはありますが、本学生以外にも、池田副学長、平島事務局長をはじめとする多数の教職員が参加し、質疑応答の時間も多数の質問が寄せられるなど、本学の復興支援に対する関心がまだまだ衰えていないことを実感することができました。

〈報告者：竹田 純子

(深草キャンパス コーディネーター)〉

企画名	東日本大震災 第1回 復興支援ボランティア 及び 報告会
実施日/場所	ボランティア：2012年9月13日(木)～16日(日) 3泊4日 宮城県石巻市 報告会：2012年9月28日(金) 17時30分～19時00分 深草キャンパス 21号館101教室
実施主体/運営	龍谷大学/ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	ボランティア：33名 (学生30名/引率3名) 報告会：約80名

■経緯・目的

2011年6月から5回、本学では、東日本大震災復興支援ボランティアバスを運行しました。今年度に入ってから学生からの『被災地で活動したい』という要望が多く寄せられ、その想いを応援するために、教職員から300万円を超える支援金が集まりました。

また、昨年度にご縁があった地域に、まだまだ活動のニーズがあるということもあり、今年度も復興支援ボランティアを実施することになりました。

震災から1年を経ているということもあり、緊急度の高い活動が求められているわけではありません。そこで、参加学生が地元の方と交流できる機会を意図的に設け、『見る・聴く・感じる』をテーマに活動プログラムを組み立て、参加者が自分に何ができるのか？を考え、被災地に関心を持ち続けることができるようなきっかけづくりを目的としました。

活動場所は、昨年度に活動実績のあるところ

にすれば、行く人は変わっても経験を積み重ねることができるので、宮城県石巻市を候補地に決め、後日、松島センター長と石川次長、竹田コーディネーターが石巻市を訪ねて調整を行い、実施ということになりました。

■概要

参加者募集にあたっては学生・教職員に対し深草・瀬田・大宮の全キャンパスでコーディネー



ターが募集説明会を実施し、活動趣旨・リスクを十分に理解した上で参加するように呼びかけました。

説明会への参加者は全キャンパスで120名ほどありました。個別に応募したいと来室する学生もいましたが、説明会への参加を応募の必須条件にしていたので、そういった学生には、次回への応募を促しました。実際に願書を提出したのは46名でした。

宿泊などの関係上、定員を増やすことができないので、応募動機で選考を行いました。参加確定者に別途説明会を実施しました。説明会では、確定しているスケジュールの説明と、質疑応答、必要書類・参加費の徴収、参加者の自己紹介を行いました。

※提出物：参加申込書、活動誓約書・保証人同意書

※参加費：2万円

●活動スケジュールは以下の通り。

1日目は、8時に深草キャンパス（京都駅集合は8時15分）を出発し、休憩を挟みながら21時ごろに宮城県石巻市雄勝に到着。亀山旅館と長栄館に分かれて宿泊。

※バスの中で仲間作りのために、自己紹介や「東北を知ろう」クイズなどのレクリエーションを実施すると共に、活動スケジュールなどもバスの中で案内しました。

2日目は、9時から石巻市社会福祉協議会を訪問し、職員の阿部由紀氏より発災当時の話や現状について話を聞きました。11時半から石巻専修大学の山崎ゼミと合流し、ランチ交流会を行いました。交流会では、ゼミで行っている仮設住宅での活動についてのお話や、地元の学生の想いについて、話を聞きました。その後、雄勝に向かい、その途中で大川小学校に立ち寄り、偶然出会ったご遺族の方からお話を伺うことができました。雄勝では硯石生産販売組合からの依頼で、地場産業の復興支援の一環で、硯石磨きの作業をお手伝いしました。作業終了後は宿に戻り、食事と入浴を済ませてから、全員でふりかえりを行いました。

3日目は、朝から硯石磨きの作業の続きに取り組みました。途中で、組合の方から旧雄勝町庁舎の中を案内していただき、発災直後の様子などについてのお話を聞きました。作業終了後は、雄勝森林公園内にある仮設住宅に移動し

て、住民の皆さんとバーベキュー交流会を行いました。ふりかえりはバスの中で実施し、スーパー銭湯で入浴後、京都へ移動。

4日目、6時に起床し、朝食休憩の後、バスの中でクールダウンのふりかえりを行いながら京都に向かう。京都駅と深草キャンパスにて解散。

活動終了後は、後日、学内で活動報告会を実施しました。活動報告会では、このボランティアバスでの活動の他に、岩手県で活動している経済学部の伊達ゼミナール、福島県で活動したスポーツサイエンスコースの松永ゼミナール、宮城県南三陸町で活動した松島ゼミナールの活動報告も行いました。

報告会終了後は、参加者のみを集めた茶話会も実施し、帰京後の心境の変化などについて、リラックスした雰囲気の中で語る機会も設けました。

■参加者の声・得られた効果など

- 参加者アンケートや寄せられた声からの抜粋
 - ・今回このボランティアに参加し、たくさんの複雑な思いがわいてきました。その中でも大川小学校では津波の恐ろしさ、命の儚さを感じました。それと同時に、最後まで先生や、生徒たちは、必死に生きようとしたんだろうなと思って、胸があつくなりました。子どもたちの夢の跡となった校舎に自分は立って、これからの人生、必死に生きぬかないと失礼だなと感じました。
 - ・僕は今回のボランティアに参加して被災地をこの目で見て今日に至るまでの自分の生活ぶりにただただ憤りを覚えました。くだらないことにお金を使うし、食事は平気で残すし、親しい友人にあいさつ感覚で「死ね」などと言うし、いわれても何とも思わないし、世界中の“どうしても生きていたかった人たち”一人一人に謝りたい気持ちでいっぱいになりました。震災からこれほどの時間が経過してやっと僕はたったこれだけのことに気づきました。ようやく僕は「ヒト」から「人」になることができました。
 - ・大川小学校では津波の傷が生々しく残っていて、幼い命が、思い出が、未来が、一瞬にして失われたのだと思うと、無念さとか、悲しさなどの思いがこみあげてきました。そこで

出会ったおじさんに「教師になるなら生徒の命だけは守ってくれ」と言われ、教師という職業の、責任の重さを感じたのと同時に、ずっと心に留めて守っていこうと決意しました。

■コーディネーター所感

今回の復興支援ボランティアでは、昨年度のように緊急的な活動が求められなくなっていることから、『学生の学び』にも力点を置いた活動プログラムを計画することにしました。

これは、活動時間が実質2日という短い時間内で、忘れられない時間を仲間と共有し、明日の復興へと想いをつなげられる濃い内容のプログラムを計画するという難題へのチャレンジでした。そのためにしたことは、『地元の多様な立場の人との出会い』をコーディネートすることでした。被災者でありながら支援者として活動した人、地元の人間として自助力を最大限に活用しながらも外部の人間であるボランティアの受け入れ窓口として調整を行っている人、地元の学生、仮設住宅に居住している様々な年代の人などと出会えるようにしました。欲張りです。タイトなスケジュールでしたが、参加した学生

は、短時間であっても、地元の皆さんとの交流の中で多くの学びと気づきを得ていました。

活動初日のふりかえりの中では、学生は口々に「自分たちは無力だ」という話をしました。しかし、ふりかえりや、様々な出会いを通して、自分を肯定的にみられるように変化してきました。

刻々と変化する被災地の状況に、遠く離れた龍谷大学として何ができるのか？これからはそのアレンジがもっと難しくなると思います。少し前までは、その場に学生を連れていくだけで、その場所が被害の大きさを伝えてくれました。しかし今は、当たり前のことですが、被災した場所の多くは整地され震災の傷跡が見えづらくなっています。そういう状況の中で、ほぼ初対面に近い学生をチームとしてまとめ、ボランティアの役割を理解してもらい、これからにつなげていくためには、これまで以上に大きなチャレンジが必要になってくると思いますが、だからこそ、このプログラムを続けていく必要性が増してくるのではないかと考えています。

〈報告者：竹田 純子

（深草キャンパス コーディネーター）

企画名	東日本大震災 第2回 復興支援ボランティア 及び 報告会
実施日/場所	ボランティア：2012年11月16日(金)～11月19日(月) 3泊4日 宮城県石巻市 報告会：2012年11月26日(月) 17時30分～19時00分 瀬田キャンパス 3号館106教室
実施主体/運営	龍谷大学/ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	ボランティア：35名 (学生30名/教員2名/職員3名) 報告会：約70名

■経緯・目的

今年度2回目の復興支援ボランティアとして、宮城県石巻市雄勝町での活動を実施しました。第1回と同じく『見る・聴く・感じる』をテーマに、現地を訪れ現在の様子や地域の方々から直接学ぶことを目的にプログラムを調整・実施しました。

■概要

【復興支援活動】

今回は30人の龍大生と5名の教職員が参加

し、宮城県石巻市雄勝町で、復興商店街「おがつ店こ屋街」の1周年記念イベントの支援活動と地場産業である硯石産業の支援活動をさせていただきました。また、旧石巻市雄勝総合支所、旧市立病院、大川小学校跡地の見学や、地域の方からお話を伺わせて頂くプログラムも実施しました。4日間という短い期間ではありましたが、とても充実した活動となりました。

さらに、事前・事後にはイベントのブース出展に協賛していただいた企業へ依頼や報告の為に参加学生が訪問しました。

●活動スケジュール

• 11月16日（金）

- 7時 深草キャンパス、京都駅から出発しバスで約13時間の移動
- 20時 途中の道の駅の温泉で入浴後、石巻市雄勝町の民宿『全勝旅館』へ
- 22時 民宿到着後、夕食、就寝

• 11月17日（土）

- 7時 復興商店街『おがつ店こ屋街』へ。バスの車窓から東日本大震災時の津波で被災した雄勝町の様子を見学
- 8時 『おがつ店こ屋街』1周年記念イベントの設営のお手伝い、龍大ブースの準備
- 10時 イベント開始、龍大のブースでは、京都の名産品販売コーナー、和風喫茶コーナー、匂い袋製作体験コーナー、お楽しみ輪投げコーナーの4つのコーナーをグループに分かれて運営
- 11時 雄勝町の地場産業復興支援の一環として、硯石の洗浄・整理作業をイベント班とグループに分かれてのお手伝い
- 16時 被災した旧石巻市立病院の見学。その後、道の駅の温泉で入浴後、民宿で夕食。
- 20時 石巻市役所の伊藤英俊さん、雄勝町復興サポーターの山本圭一さんをゲストに迎え、発災時とその後の道のりについてお話を伺う
- 22時 本日の振り返り、参加者1人1人が感じたことを語りながらの振り返り

• 11月18日（日）

- 2時 昨晚のゲスト山本さんのお誘いで、希望者10名がホタテ養殖の漁業支援の活動に参加
- 8時 大川小学校跡地を見学
- 9時 『おがつ店こ屋街』へ。今回のイベントの実行委員で、雄勝町硯生産販売協同組合の高橋頼雄さんにご案内いただき、旧石巻市雄勝総合支所内を見学。震災発生時のお話や防災に関するお話を伺う。
- 10時 イベント開始、硯石の洗浄・整理作業のお手伝いも開始
- 15時 2日間のイベント終了、片付
- 16時 雄勝町を出発、道の駅で入浴・夕食。



- 20時 石巻市を出発、帰路バスで約12時間の移動

• 11月19日（月）

- 6時35分 瀬田キャンパス着、解散
- 7時30分 京都駅着、解散
- 8時00分 深草キャンパス着、解散

【活動報告会】

活動終了後、学内に向けた活動報告会を実施し、体験を出来るだけたくさんの人と共有する機会を設けました。また、報告会終了後、参加者のみを集めた交流会も実施し、参加学生の心境の変化などについて、リラックスした雰囲気の中で語る機会も設けました。

■参加者の声・得られた効果など

- 実際に現地に行って、自分の目で見たり、お話を聴いたり、いろいろなことを感じる事ができたのは、自分にとって貴重な体験だった。まだ、行っていない人は、ぜひ現地に行って体験してほしい。
- 3泊4日の活動の中で一番印象に残っているのは、復興祭で「御神輿」に参加させてもらったこと！街の復興の象徴である御神輿と一緒に担がせていただいたことで、現地の人とつながっているように感じられて、とても嬉しかった。
- 震災後、たくさんのボランティアが関わって、集め、洗浄・整理してきた硯石に自分たちも携わっているのだと分かった。一人ひとりにできることはとても小さい、けれどできることはある。そして、つないでいくことが何よりも大切だと感じた。
- 私たちにできることは、まだまだあるんだと感じました。これからも、自分にできることを探して、行動したいです。

■コーディネーター所感

震災から1年8ヶ月が経過し、マスコミ等で話題に上る機会が減少する中、多くの学生から本プログラムへの参加の志願があり（募集説明会参加者約180名、応募者60名）、まだまだ現地への思いが繋がっているということを感じました。

参加者にとって、現地活動2日間という短い期間ではありましたが、『見る！聴く！感じる！』のテーマの通り、仲間とともに体験的に多くを学ぶことができた貴重な時間となりました。活動後には、自分たちの体験してきたことを『伝えること！伝え続けること！』が、これからの目標だと確認し、活動や思いを継続していこうという声が聞かれたのが印象的でした。

また、今回のボランティア活動では、「京都

らしい催しを」という現地からの要請を受けて、多くの企業様にご協賛をいただきました。ありがとうございました。

協賛企業と品物（五十音順）

株式会社	一保堂茶舗	京銘茶（ほうじ茶）
株式会社	井筒法衣店	京の念珠（腕輪念珠等）
株式会社	井筒八ッ橋	京菓子（八ッ橋）
今西製菓	株式会社	京菓子（飴）
株式会社	くろちく	京の土産物（和雑貨等）
株式会社	松栄堂	京の香り（お香、匂い袋）
京つけもの	西利	京漬物（おつけもの）
株式会社	長谷川松寿堂	京和紙（折紙）
株式会社	美好園	龍大オリジナル宇治茶「雫」

〈報告者：東郷 珠江

（瀬田キャンパス コーディネーター）〉

企画名	東日本大震災 復興支援フォーラム 『震災は他人事（ひとごと）じゃない！東北沿岸600キロの震災報告』 ～つながり続けるということ～
実施日／場所	2012年12月1日（土）13時30分～16時30分 深草キャンパス22号館101教室 ※写真展：12月1日（土）10時00分～17時00分 深草キャンパス22号館107教室
実施主体／運営	龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	フォーラム、写真展共に約200名

■経緯・目的

震災から1年以上経ち、震災に関する報道が減っていく中、被災地の現状が関西からは見えにくくなってきました。しかし、東日本大震災で深刻な被害を受けた地域の復興は、まだまだ進んでいません。私達には、その現状に目を背けることなく、一緒に復興に向けて歩み続けることが求められています。そのため、被災地域を幅広く取材されている写真家の大西暢夫氏を講師としてお迎えし、発災直後から現在までに取材した被災地の状況をお話していただき、被災地に興味を持ち続けるためのきっかけにするためにこのフォーラムを企画しました。

■概要

●内容

①大西 暢夫 氏の講演

発災直後から現在まで、取材を通して見てきた被災地の姿について、写真を見せなが



ら、その時のエピソードを交えながらの講演。

※大西氏の講演と学生との質疑応答の2部構成

- ②宮城県石巻市雄勝の物産展
- ③復興支援活動についての展示
- ④大西暢夫写真展

●スケジュール

- ①開会の挨拶 池田勉副学長より
- ②学生からの復興支援活動の報告
 - ※司会者（学生2名：深草・瀬田キャンパスの学生スタッフ代表）より、今までの大学としての復興支援の取り組みについて説明
- ③大西 暢夫 氏からの講演
- ④『東北沿岸600キロ震災報告』、『3.11の証言～心に留める東日本大震災』の販売及び、雄勝物産品販売。
- ⑤質疑応答
- ⑥閉会の挨拶

■参加者の声・得られた効果など

- アンケートに寄せられた声は以下の通り
- ・今回の話を聞き、また被災地で見て感じた気持ちになりました。しばらく時間が経って今の大学生活にまた戻ってしまっていた自分が恥ずかしくなりました。この気持ちを忘れずに人に「伝えること」を中心に自分なりの方法でしていきたいです。
 - ・「死んだ人を放っておいても生きる人のチカラを大切にする」というお話が、一番衝撃でした。3.11発生当時のもどかしいつらい気持ちを思い出しました。そしてこの気持ちこそ、忘れてはならない、伝えるべき事柄だと強く再確認しました。
 - ・震災から1年半以上が経ち、私の中で震災への思いが少しずつ薄れていっている中で今日のお話をお聞きして決して風化させてはいけ

ないと改めて感じました。私は神戸出身で阪神・淡路大震災で被災しましたが、幸い私の周りの被害の状況は少なく私自身の記憶も断片的にしか残っていません。自分たちの記録を残してほしいという思いを受け取り、活動されている大西さんに感銘を受けました。本日は貴重なお話ありがとうございました。

■コーディネーター所感

震災から1年半が過ぎ、震災に対する思いの温度差が被災地と関西の間で大きくなってきています。一日も早い復興を目指し、被災された人たちと一緒に歩み続けるためには、これからも被災地とつながり続けることが不可欠ですが、関心を持ち続けてもらうための働きかけが非常に難しくなっています。

今回のフォーラムでは、被災地を丁寧に取材され続けている大西氏から、被災された皆さんの生の声を聞かせていただきました。参加された皆さんは、時に涙を流しながら、メモを取りながら熱心に話を聴いていました。

大西氏のお話から、見えづらくなってきた被災地の声に耳を傾け、復興への想いを新たにするきっかけになったのではないかと考えています。

これからも発信し続けることが大切な役割だと実感しました。

（報告者：竹田 純子
（深草キャンパス コーディネーター））

企画名	被災地の“今までの復興支援”、“これからの復興支援”について語ろう！ ～復興支援ボランティアの最前線にいる人と一緒に！～
実施日	2012年12月14日（金）17時20分～19時30分
場所	深草キャンパス22号館107教室
実施主体	ボランティア・NPO 活動センター
参加人数	30名

■経緯・目的

震災から1年以上経ち、震災に関する報道が減っていく中、被災地の現状が関西からは見えにくくなってきました。「もう、だいぶん復興したのでは？」「自分たちにできることはもう

ないのでは？」と考えている学生に、復興支援ボランティアについての想いを持ち続けてもらうために何ができるのかを考えていました。

ちょうどそんな時に、本人も被災者でありながら、発災直後から最前線で被災者支援のため

に働き続けている石巻市社会福祉協議会の職員の方が来京されるとの連絡を受けました。そこで、“今までの復興支援”と“これからの復興支援”について考えるワークショップを開催することにしました。

■概要

講師：石巻市社会福祉協議会 災害復興対策課
阿部 由紀氏

前半は阿部氏から発災直後の様子、その際、どのような判断を迫られながら行動したのか、何を大切にしながら毎日をご過ごしていたかについて語っていた



き、後半は『人を好きになるには?』をテーマにグループで話し合いました。その結果、参加者からは、『心を開く』『尊敬する』『関心を持つ』など、いろいろなキーワードが出てきました。総括として、人を支援するという事は、結局、『人が好き』であるということが根幹にないといけないことではないかという結論が出たところで、終わりとなりました。

■参加者の声・得られた効果など

アンケートに寄せられた声を一部紹介

- 阿部さんのイメージ、想像力の豊かさにとっても感銘を受けました。自分が何かを決断するときは、「どっちが良いか」と選択肢の吟味のみで終わってしまうので、なかなか次の選択肢が見つけれられない状態に陥ってしまうのです(例えば、就職を考えるとき)。そのため、自分に足りないことは「想像力」だと、今日

気付くことが出来ました。震災復興のヒントにとどまらず、人生のヒントを与えて下さり、ありがとうございました。

- 9月に一度お話を聴かせていただいて、危機意識の大切さを知りました。今日のお話では相手の立場に立つことの重要性を再認識しました。自分の身に寄り添ってくれる人は、好きです。相手の立場で考えると、その人のことが少し好きになります。「好き」って原動力だと思います。

■コーディネーター所感

復興支援に関心のある学生ばかりが参加したワークショップだったので、とても密度の濃い学びと気づきの時間になったように感じています。

また、復興支援だけではなく、広く『対人援助とは?』『ボランティアとは?』について原点から考える良い機会になっていました。

参加学生は、『厳冬の季節に濡れている被災者が大勢いる中、ほんのわずかしかない毛布を配布する時に下した苦渋の決断』『食料を分け合った時の周りの反応』『自身も被災者でありながら、ボランティアセンターに宿泊して働き続けたこと』など、阿部さんの語る発災当時の生々しい状況のお話に大きな衝撃を受けていました。

これらのお話を聴いたり、みんなで話し合った過程で参加者それぞれが、大きな気づきがあったようでした。これからも、このようなテーマとじっくり向き合う時間が作れればと思います。

〈報告者：竹田 純子

(深草キャンパス コーディネーター)〉